

何物にもかえがたい宝

高松・庵治中 合田 眞由美

庵治中学校での勤務も今年で、8年目になる。講師の時代や2回目の勤務の年数を合わせれば14年間を本校で過ごしている。帰宅途中、丸山峠から眺める屋島や瀬戸内海は、季節や時間帯によって日々表情を変え、何度見ても魅了される。そんな庵治中での教育活動は、同じ町内にある大島青松園の入所者の方との交流と共にあり、入所者の方々の創作詩や川柳、俳句や短歌から学ぶものはあまりにも多い。

映画「風の舞」で、その生涯が描かれた詩人塔和子さんの「影絵」という詩の中に、「何物にもかえがたい宝」という言葉がある。親や兄弟、小学校の同級生、初恋の人などは、何物にもかえがたい宝であり、「現実の私を支えてくれる柱」とであると、塔さんは詠んでいる。

～「青松」第585号より 大島青松園 協和会発行～

私にとって「何物にもかえがたい宝」は、国語の授業で学び合う子どもたちであり、授業中に発せられる意見やつぶやきであり、分かったときに見せるとびきりの笑顔である。韻文を学習したり、行事があつたりする度に子どもたちが創作した数々の作品もまた宝物である。

創作した俳句や川柳などの作品は、教室内で交流するだけではなく筆ペンで浄書し、全校生が通る廊下に掲示している。他学年の生徒や教職員が見て称賛してくれることも多く、子どもたちは活動に意欲をもって取り組んでいる。

現在の3年生が、1年のときに創作した川柳と、3年になって創作した俳句を並べて紹介したい。

テーマ：「庵治祭」（1年時）

- ①寒い中笑顔にぎわう文化祭
- ②素敵だな先輩たちの歌声は
- ③お昼ごはんおにぎり弁当おいしかった

- ④吹奏楽みんな手拍子してくれた
- ⑤合唱で歌と心を響かせる
- ⑥庵治祭後なかまが増えた金魚たち

テーマ：「季節」（3年時）

- ①帰り道新涼のなか立ち話
- ②朝寒く風が涼しく冬隣り
- ③山々をもみじが囲い秋を感じる
- ④残暑消え雲ひとつなき空広い
- ⑤桃梨を頬ばる私は夢心地
- ⑥金木犀小さい花が星のよう

①～⑥はそれぞれ同一の生徒の作品である。言葉選びや表現技法の使い方などに成長が見られ、作品に豊かな情景や心情が伺える。

3年になり、俳句の鑑賞文を書く学習でも自分の生活に重ねて俳句を味わうことができた。次の文章は石田波郷の「バスを待ち大路の春をうたがはず」の鑑賞文である。

○青年がバスを待っている間に、においや音から春が来たことを感じている。僕がこの作品でいいなと思ったところは、電車や車ではなくバスを詠んでいるところだ。僕たちの修学旅行はバスでの移動が多く、旅行の思い出とこの俳句の感じが少し似ているなと思った。

○私は「大路の春」という言葉が特に好きだ。桜や学生などという言葉は使わず、ただ「春」と表現することで幅広く想像できるからだ。私は来年から高校生なので、自分の学校に行くためにバスを待っていて、風に揺れる桜を見ている情景が浮かび来年の春が待ち遠しくなった。

一つの俳句から修学旅行を思い出す生徒、4月からの高校生活に思いをはせる生徒がいて、そのどちらからも生きる喜びが伝わってくる。

塔和子さんは、映画の中で、「詩は命の綱」と述べ、「人として、生きることの意味を問うもの」と述べている。

私は「何物にもかえがたい宝」である子どもたちとこれからも共に学び、生きることを意味を考えていきたい。